

会長就任挨拶

— 百年時代を生きる —



中西 喜彦

今年5月例年のように編集会議を開いて「炉ばたセイ談」の発行について協議することに致しました。早速、澁谷さんに連絡したところ、奥様が対応されてどうも澁谷は体調が思わしくないので今後のことは宜しくとのことでした。

そこで、ワクチン接種などの対策後、例年より一ヶ月遅れで入院院邸に集まり、今年発刊の可能性について協議しました。重朝庵主は今年9月90歳を迎えられますが、大変お元気で「今からは百年時代だ、是非続けたい」

とのことでした。そこで、編集長の小生が会長役をお引き受けし、下土橋さんを編集長に、編集担当の方に入来院久子さんに参加して頂き、思いを新たに続行となった次第です。

振返ってみますと、入来院貞子さんがお亡くなりになったのが平成23年5月ですので、今年で10年目を迎えます。丁度お亡くなりになった年の4月末に原稿催促のはがきが来ていました。葬儀後、重朝庵主に会誌発行をどうされますかとお尋ねしました。「続けましょう。貞子の供養にもなる」ということでした。そこで、故桐野三郎元会長と相談しながら、「貞子さんに再会」を旗印に、初年は沢山の弔辞、貞子さんの略歴や著作の題目などを採用しました。以後3回忌、7回忌、重朝庵主の米寿のお祝いなどを収録してきました。また論客達の文を掲載できました。大変残念なことに前会長の澁谷繁樹さん

が7月にお亡くなりになりました。本誌1号からの論客で発刊当初からの雰囲気を漂わせて頂きました。先輩を差し置いての早すぎる死に、澁谷さんが生前貞子さんに送ったお別れの言葉を抜粋して、澁谷さんへのお別れの言葉にしたいと思います。

「信州東京入来に地球、どこいたってオヒメサマ なにをしようがみんな得心 アノネ エエ おっとりゆるやかミヤビヤカ 落花世の常わかるけど さびしいよテイコサン」

このお別れの言葉で、「信州を鹿児島にオヒメサマをオボツチャマに、テイコサンをシゲキサン」に変えてみました。

好漢逝く。合掌。

さて、表題に戻りますが、色んな意味で、

これまで人類が経験したことのない時代に突入しました。縁のある人々が本誌に集い色々な知恵を交換出来ることを期待いたします。

また、今年10月に「入来花木会」を入来院久子会長のもと再興されます。800年近い歴史を持つ入来麓武家屋敷地区の美観や景観を大事に保存し、入来院家の財産である茅葺門や入来文書を活用し、麓地区に残る文化遺産を広く世間に知って頂くというものです。最近の歴史研究は文書だけでなく、神社、仏閣、その付属施設などの価値が見直されています。こちらの方も新体制にご理解とご協力をお願いします。

